

文庫

●柘野浩一編『ドラえもん短歌』 「僕たちが今進んでいる方向の未来にドラえもんはいますか(仁尾智)」など、歌人の呼びかけたお題「ドラえもん」のもとに集まった短歌は、誰もがいちどは夢見た「あんなこといいな」の世界、親しみのあるキャラクター、といった共通言語が、私性と普遍性を取りもつ。単行本未収録作品も増補。(小学館文庫・480円)



●津村節子著『土恋』 生活雑器のなかに「用の美」を見いだす「民芸運動」は、日本各地で細々と保たれてきた手仕事に光をあてた。そのひとつ、新潟県の庵地焼に魅せられた作家の取材にもとづく創作。土地の土の特質を生かすための根気のいる営みを支えてきた女性たちの苦闘から、女性陶芸家が生まれるまでの物語。

(ちくま文庫・714円)

●小林美佳著『性犯罪被害にあうということ』 著者は、24歳の夏、2人組の男にレイプされる。今もよみがえる恐怖に襲われる心と体。被害者なのに周囲の目に脅かされる矛盾。その歯がゆさと苦しさは、身近にいる家族、友人、恋人に怒りとして向けられる。性犯罪被害の心の内を赤裸々に描く。

(朝日文庫・567円)

新書

●溝口優司著『アフリカで誕生した人類が日本人になるまで』 私たちの祖先は、700万年前ごろ猿人として分岐し、人類の進化の道を歩み始めた。その進化はどのように進み、人類が世界各地に移住、適応したのか。化石人類の姿形の特徴から現代の日本人のルーツを探る。人類をめぐるさまざまな説が紹介されるなかには、ネアンデルタール人と現生人類の異種交配があったという昨年発表された研究結果も。

(ソフトバンク新書・767円)

●山本太郎著『感染症と文明』 社会や文化を含めた環境に対し、人間集団がいかに対応したかの尺度が健康と病気。定住・農耕と動物の家畜化による文明は「感染症のゆりかご」となった。植民地化にともなう医学の発展や開発がひき起こす病気など、感染症と人類の攻防のドラマをたどり、その行方を考える。

(岩波新書・756円)

●コリン・ジョイス著『「イギリス社会」入門』 王子の結婚式で盛り上がる英国王室だが、実はかれらは「外国生まれ」。そのことが英国の歴史に面白みを加えている、という著者は「ニューズウィーク日本版」記者などとして日米滞在も長いジャーナリスト。階級、天気、お茶など定番の話題をひとひねりして味わいを深める。

(森田浩之訳、NHK出版新書・819円)